氏 名 （ 本 籍 ）	中川洋子　（静岡県）
学 位 の 種 類	博士（　言語学　）
学 位 記 番 号	博　甲　第 6667 号
学位授与年月日	平成 25 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	A Critical Study of the Relationships between the Japanese Ideas of English and English Language Teaching in Japan in the 1980s-2000s: Focusing on the Influence of Media Images of English （1980～2000 年代日本における英語観と英語教育の関係性に関する批判的研究 −メディアに現れた英語イメージの分析を通して）

主　　査	筑波大学教　授	Ph.D.（スピーチ・コミュニケーション）	津田　幸男
副　　査	筑波大学准教授	Ph.D.（言語人類学）	井出　里咲子
副　　査	筑波大学准教授	Ph.D.（言語学）	高木　智世
副　　査	筑波大学准教授	博士（文学）	臼山　利信

論　文　の　要　旨

本論文は、1980～2000 年代における日本人の英語観と英語教育の関係性について、テレビドラマや英語教科書、学習指導要領などのメディアの分析を通じて検討するものである。

具体的には、日本人の英語観を、(1) 英語コンプレックスから英語の積極的受容への転換、(2) 道具的英語観、(3) 国際語としての英語、の 3 つの観点から分析し、英語観と英語教育の方向付け、それに伴う問題点を明らかにすることを課題とする。

本論文は 7 つの章から成り、まず第 1 章で「研究の目的」と「英語観の定義」などを明らかにし、第 2 章では「英語観」に関する先行研究と本研究の理論的枠組みについて説明した。

第 3～6 章は本論文の議論の本体に当たるところで、第 3 章では「帰国子女と英語観の変遷」を、第 4 章では「生きた英語」と「受験英語」の対立を、第 5 章では「高校英語教科書の英語観」を、そして第 6 章では「高校英語教科書の中の‘国際語としての英語観’」をそれぞれ取り上げている。

そして第 7 章で「結論」を述べている。

従来より、国内の英語教科書や学習指導要領は、その歴史や言語学的側面、異文化コミュニケーション能力養成、日本人の価値観や英語のイデオロギー性など、様々な角度からの分析が行われている。本論では新たに、日本人の英語観を「メディア」と「コミュニケーション」の観点から分析するため、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann）のコミュニケーション・メディア論を理論的枠組みとして議論を進めた。ルーマンの定義に従い、「不確実さを確実さに変換させる機能に資している、進化上の獲得物」を「メディア」とし、英語教育を方向付ける学習指導要領や政府公式文書、「生きた英語」「受験英語」などの英語観を取り上げるテレビドラマなどのマスメディア、そして指導要領の具現化としての英語教科書などを「メディア」ととらえた。このように、「メディア」を介して、ある一定の枠組みで英語という言語の内容や目的が限定され、学習者はこれらの「メディア」を媒体に、それぞれの動機や目的に応じて自ら必要とする英語観を選び取る。つまり「複雑性の縮減（reduction of complexity）」（Luhmann, 1984/1995）が行われる過程に英語の権力性

が見られることを指摘した。

本研究では、以下の理由から 1980～2000 年代に焦点をあて、分析を試みた。第一に、この時期に英語のヘゲモニー性や権力性について日本や海外の研究者による議論が活発に行われるようになり、それにより、英語を国際語（English as an International Language[EIL]）とみなすことに伴う問題点や、言語の平等、特に、少数言語や危機言語といった英語以外への言語への関心を引き起こしたのである。第二に、1980 年代初めから、国内における帰国子女問題が表面化し、帰国子女が海外生活で獲得した価値観や、行動、ふるまいが、他の日本人と異なることから、帰国子女の使用する英語が、教育現場で学習する英語の内容と一致しないことによる混乱等の問題も明るみに出た。したがってこの時期に着目し、帰国子女を題材に帰国子女とそれを取り巻く日本人教師や生徒との関係から、英語観の分析を試みることは意義深いと判断した。

本研究では、テレビドラマや学習指導要領などの政府発行の公式文書、英語教科書などのメディア分析の結果、以下の点について明らかにした。

第一に、帰国子女の登場するテレビドラマを題材に、1980～2000 年代における帰国子女とそれを取り巻く教師や生徒との関係を分析した結果、日本人の英語観が、英語に対して抱くコンプレックスから、英語を積極的に受容しようという姿勢へと転換したことが明らかになった。また「生きた英語」や「受験英語」、「学校英語」といった英語観の対立が生じている英語教育について、英語教育の今後の方向性や、英語をどのように教えるべきかなどといった問題について議論を行った。本研究では、『絆　たったひとつの青い空』（1987、NHK）、『3 年 B 組金八先生』（第 8 シリーズ）（2007、TBS）、『フルスイング』（2008、NHK）、『ドラゴン桜』（2005、TBS）という 3 つの作品を分析・考察の対象とした。

第二に、臨教審の第 2 次答申や 2000 年代のテレビドラマを分析した結果、「英語はコミュニケーションの道具である」、つまり英語を道具と見なす「道具的英語観」が明らかになった。ルーマンのコミュニケーション・メディア論の見方を参考に、英語学習者が「生きた英語」や「受験英語」などといったメディアから発せられる英語に関する様々な概念によって、自発的に英語を学習するよう動機付けられ、その結果、学習者自らが英語学習に自発的に同意していくという過程を明らかにした。また、英語を道具と見なす考えが、道具が使えるか使えないかで人々を序列化する傾向を作り出す、つまり、英語によるコミュニケーション能力の有無が社会的不平等を作り出し、新たな英語コンプレックスを作り出すという問題点を指摘した。

第三に、「国際語としての英語」（English as an International Language）という英語観には英語を国際語の一つとして見なす観点と英語を唯一の国際語（ETIL: English as ‘the’ International Language）とする観点がある。この枠組みから高校の英語教科書を分析した結果、3 つのイデオロギーの存在を明らかにした。まず、（1）英語が成功へのパスポートであるというイデオロギー、（2）国際理解や国際貢献に見られる西洋普遍主義イデオロギー、（3）会話の練習問題に見られる英語優先主義イデオロギーである。国語の教科書の内容との比較からも、英語の教科書では、著名なスポーツ選手や音楽家などが成功や夢について語る様子が英語で書かれており、日本の英語教育では英語学習と社会的成功との関連付けが顕著であることが分かった。また、教科書で取り上げられる国際貢献や平和問題に関与する日本人の語りからは、欧米の視点からの異文化理解が前提となっていることがうかがえた。さらに、会話の練習問題で英語の優先的使用が前提となっており、場面の提示の仕方次第では、英語以外の言語や日本語自体の軽視につながることが懸念されると指摘した。

以上の分析の結果、本論文では、日本には「生きた英語」や「受験英語」、「学校英語」などの様々な英語観が錯綜し、時に教育現場で対立を引き起こしていること、学習指導要領やテレビドラマ、教科書などのメディアが、学習者やそれを取り巻く人々と相互に関わりながら英語観に影響を与え、英語教育を方向付けている構図を指摘した。そして、日本人の英語観と英語教育の関係を理解することを通じて、英米の思考様式を超えた、話者自身の文化、思想に基づいた英語使用の必要性を提言した。

審　査　の　要　旨

１　批評

本論文は日本の英語教育について「日本人の英語観」に焦点を当ててメディア理論の枠組みで考察したもので、日本人がどのような英語観を持っているのかはもちろんのこと、それがどのようにして生産され、社会に流布されていき、そして日本の英語教育にどのような影響を与えているのかを明らかにしている優れた批判論である。

「学校英語」「生きた英語」「道具としての英語」などの英語観が、帰国子女を主人公にしたテレビドラマや文部科学省の指導要領、中教審答申や高等学校の英語テキストなどの「メディア」により生産されて、社会に流布されることにより、日本人の間に英語学習が促されている現状をテレビドラマ、政府公式文書、英語テキストの中味を丹念に分析解釈することにより、日本の英語教育には権力の介在があることを明確にしている。

さらに、「国際語としての英語」という英語観を取り上げ、高等学校の英語テキストにおいて英語が唯一の国際語であるという英語観が支配的であることを明らかにし、そのような英語観が支配的であると英語ヘゲモニーを肯定する英語教育に陥る危険性があることを指摘して、英語教育において相互の言語文化を尊重する「言語相対主義」や「ことばの平等」といった言語観の確立を提言している。

また、第 4 章では、学校英語教育における「生きた英語」と「受験英語」という 2 つの英語観の対立を明らかにしており、この対立が学校英語教育の問題としてまだ十分に研究されていない現状において、本研究で取り上げたこと自体が、日本の学校英語教育への意義ある問題提起であるといえる。

また、本論文の大きな特徴として、テレビドラマを取り上げて日本人の英語観を考察した点が上げられる。現実の学校の教室の表象として、ドラマの中で交された会話や教師や生徒のことばが日本人の英語観を生き生きと映し出している点に着目し、それをもとに議論を展開したことがこの研究に一層の説得力を与えている。

いくつかの批判と指摘も出された。まず、特に学校教育における学習指導要領の絶対的権威性をより強調することにより、指導要領の理念の実践の場としての教室を描くドラマと指導要領の理念が具象化された教科書という二つのメディアがより明確に結び付くのではないか、という指摘である。また、この研究の対象を日本の中等学校教育の英語教育に限定した理由と背景をもっと明確にすべきであるという指摘もなされた。さらに、理論的枠組みを説明する図の精度を上げるともっと説得力を増すという助言もあった。このような批判が出されたが、同時にこれらの批判はこの論文の価値を損なうものではないという点で審査員全員一致した。

２　最終試験

平成　25　年　5　月　17　日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。